

遠矢 純一郎さん（桜新町アーバンクリニック院長）のメールから：  
2020年12月15日 23:20  
貫田さん講演会 「認知症とともに生きる」

当院の看多機と訪看を利用されている貫田直義さんは、1-2年前からの発症で、レビー小体型認知症と診断されました。  
関わる看護師たちが、みんなにも貫田さんの話を聴かせたいと院内の講演会を企画してくれました。  
寒い中、事務所までお越し頂いた貫田さんは、持参されたスケッチブックを開きながら、まずは幻覚について、絵を示しながら語り始められました。

いつもは騒がしいお昼時間が、今日はしんと静まりかえり、みんなが集中して聞き耳を立てるという特別な時間になりました。  
以下は、貫田さんのお話を伺いながら綴った自分のメモから。  
僕の感想なんかより丸ごとを届けたくて、長いですが、ぜひお読みください。

————\*★\*————\*————\*★\*————\*————\*★\*————\*————\*★\*————\*

様々な幻視や妄想を体験し、それらを受け入れて暮らす日常。  
ヘッチャラと思う方だけど、いきなり廊下におじさんとか立っているとやっぱり怖いと思うこともある。相当メンタルをやられてしまう。  
レビーの診断は難しいと思う。  
自分も最初は誤診だと思った。セカンドオピニオンにもかかっている。  
医者との信頼関係を保つのはとても大事。いろんな症状がでてくるので、病院にかかることが多い。  
自律神経失調や不眠、食思不振、体重減少（-15kg）など、レビー小体型の症状もある。  
今日はわざと昔の太っていた時の服を着てきた。こんなにぶかぶかになりました。

よく夢をみる。貿易商になったり、知らない場所に居たり。  
時には格闘技の試合に出て、1対3で闘っていたり。「鬼滅の刃」、ああいう妄想をみる。  
あんな物語を作れるのは、制作スタッフの中に認知症の方が居るに違いない。

年賀状の宛名書きができなくなる。  
手紙なども郵便番号が書けない。字が形にならなかつたり、マスから飛び出してしまう。  
去年も40枚くらい書き損じた。  
予想はしていたけど、こんなに字が書けなくなるとは。  
細かい字になるほど、乱れてしまう。  
「世田谷」は書けるけど、「葛飾区」は書けない。

自分の中に今まで持っていた価値観が、ぜんぶ壊れる。

携帯やパソコンなどをなぜか敬遠してしまう。髪も伸び放題だけど、おっかなくて美容室に行けない。

美容師さんに来てもらったけど、それもおっかなくてダメだった。

看多機を利用することは、自分にとって大成功だった。

1週間のリズムが作れる。80-90歳の自分より年長の先輩たちがおられる。

若いスタッフもいる。そんな多層の年代の中に居られるのは自分にとってプラスになっている。

年長者の方たちの生きる生き様がみられるのがすごいと思うし、若いひとたちの働きぶりに感動する。

彼らの一生懸命さに感心する。

超高齢社会、僕らは団塊の世代。認知症も600-700万人くらいいる日本。

認知症は誰でもなる病気。

だとすれば、認知症になっても安心して暮らせる社会であるべき。

そのような世の中を作っていくかねばならない。

これは政府というより市民の手で作っていくものだろう。

そのためにも認知症への偏見をみんなで潰していくことが大事。

「あのひと呆けちゃったみたい、あっち側へ行ってしまった」なんて言われるのは、人が作り出した社会。(略)

